教科としての小学校英語の指導に関する実践報告
―評価に焦点をあてて―

市原佐知（ICHIHARA　Sachi）
高知県中土佐町立久礼小学校

要約

本校は２０１４年度より４年間，文部科学省「外国語教育強化地域」の指定を受け研究開発に取り組んでいる。初年度は，小学校第３学年，第４学年で週１時間，第５学年，第６学年で週２時間の外国語活動を行った。昨年度からは第５学年，第６学年で外国語科を行っている。本稿は教科化に伴う指導と評価の一体化をめざした一実践の報告ある。
（キーワード：小学校外国語科，学習到達目標，パフォーマンス評価）

１．はじめに

「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が文部科学省から示され，小学校の現場は大きな変化を求められている。本校では，２０２０年度の新教育課程全面実施に向けて，外国語活動と外国語科の共通点と相違点を明確にしながら，「小学校にふさわしい外国語教育の在り方とはどのようなものか。」また，緩やかに中学校につなげ，「教育効果を上げる学習指導内容はどのようなものか。」を研究してきた。本稿では，この３年間の取り組みの中から，「評価」に焦点をあてて実践報告を行うこととする。

２．教育課程

教育課程については，第３，４学年は活動型を年間３５時間，第５，６学年は教科型を年間７０時間で行っている。その中で，第３，４学年で「読むこと」を始め，文字と出合い，第５，６学年で「慣れ親しみ」を試行している。教材は，従来の『Hi,friends！1,2』に加え第３学年から新教材の『Hi,friends Plus』を活用してい

る（表 1)。

表 1　外国語指導体制

学年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
活動	外国語活動				外国語科	
授業時数	5 時間/年		35 時間/年		70 時間/年	
学習内容	聞くこと・話すこと				聞くこと・話すこと 読むこと・書くこと	
			読むこと・書くこと			
教材	自主教材		自主教材 Hi,friends Plus		Hi,friends！1 自主教材 Hi,friendsPlus	Hi,friends！2 自主教材 Hi,friends Plus
指導者	担任， ALT,JTE		担任,ALT,JTE,中学校英語教員			
学習場所	English room,アクティビティールーム					

3．外国語科の新設に伴う研究内容

（1）教科カリキュラムの運用・修正

教科カリキュラムを作成する際に留意した点は以下の 3 点である。

① 観点の変更

教科における評価の観点は，つながりを考慮し中学校と同一にする。それによって，教科として学習者の技能面は「慣れ親しみ」から「定着」を指導者が目指す。しかし，4 技能のバランスを重視する中学校に対して，小学校ではあくまで「聞く」「話す」に重点を置き，元来の「活動型」の趣旨を踏襲する。「言語や文化」に関しては，「気づき」から「知識，理解」まで段階を上げることによって定着を目指す。（表２）

表２　評価の観点

外国語活動	外国語科
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	
外国語への慣れ親しみ	表現の能力（**聞く**＞書く）
	理解の能力（**話す**＞書く）
言語や文化についての気づき	言語や文化についての**知識・理解**

② Can-Do リスト形式の学習到達目標の作成（表３）

学習到達目標を Can-Do リスト形式にすることによって，小学校終了時に，児童が英語を使ってどのようなことを話し，聞くことができるようにさせたいかを明確にする。さらにそのことを指導者間で共有する。

表３　観点別学習到達目標（久礼小中学校）

<table>
<tr><td>技能</td><td>小学校１，２年</td><td>小学校３，４年</td><td>小学校５年</td><td>小学校６年</td><td>中学校１年</td><td>中学校２年</td><td>中学校３年</td></tr>
<tr><td></td><td>学校裁量の英語活動</td><td>外国語活動</td><td colspan="2">外国語科</td><td colspan="3">英語科</td></tr>
<tr><td rowspan="2">聞くこと</td><td>日常生活の中で見聞きする簡単な事柄について，絵やジェスチャーを手ががりにして外国語を聞きわけようとする。</td><td>日常生活で体験的になじみのある内容に関する英語であれば，絵やジェスチャーなどを手がかりにして聞きとろうとする。</td><td>日常生活や学校生活の身近な特定の場面において，補助的な手がかりがあれば大まかな内容を理解できる。</td><td>日常生活，学校生活，地域生活に加えて，将来を見通した身近な特定の場面において，補助的な手がかりがあれば，大まかな内容を理解できる。</td><td>基本的な語句が使われていれば，英語を聞いて概要や必要な情報を聞き取ることができる。（Warm-up, U6,9, LP1,2）

基本的な語句で話されていれば英語の問いに応じることができる。（U5,8, LP3,4,5 SP2）</td><td>ゆっくり話されれば，英語を聞いて身近な題材に関する情報の概要や要点を聞き取ることができる。（Warm-up, LP1,2,3,4,5, 6,7）

話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら理解することができる。</td><td>まとまりのある英語を聞いて概要や要点を適切に聞きとることができる。（LP1,2,4,5,6）</td></tr>
<tr><td>話すこと</td><td>音をまねながら簡単なあいさつをかわしたり，たずねられたことにジェスチャーや簡単な単語を使って応じようとする。</td><td>日常生活でなじみのある事柄（あいさつ，天気，自分の名前，好み，気分，持ち物等）であれば，短く簡単な語句を使って話したりたずねたりしようとする。</td><td>日常生活でなじみのある事柄（あいさつ，天気，自分の名前，好み，気分，持ち物等）であれば，短く簡単な語句を使って話すことができる。</td><td>日常生活でなじみのある事柄（あいさつ，天気，日時，自分の名前，好み，気分，持ち物，習慣，願望等）であれば，短く簡単な語句を使って聞き手を意識しながら話すことができる。</td><td>発表メモ書き等の準備ができていれば，身近な事柄について，基本的な語句や表現を使って簡単なスピーチができる。（Warm-up, U1,9）

やりとり身近な事柄であれば，それに関する英語の問いに基本的な語句を使って気持ちの良いやりとりができる。（U2,10, MP2, SP3,4）</td><td>発表メモ書き等の準備ができていれば，身近な事柄についてテーマに沿って簡単なスピーチができる。（U7, M P3）

やりとり聞いたり読んだりしたことについて，すすんで反応しながら問答できる。（SP1,2,3,4）</td><td>発表メモ書き等の準備ができていれば，身近な題材について自分の考えを論理的にスピーチができる。（Warm-up,U2, 5, MP1,2,3）

やりとり日常的な話題や場面があれば，見聞きした事柄に関して，聞き手を巻き込みながら情報交換，意見交換ができる。（SP1,2 U5）</td></tr>
</table>

読むこと		アルファベットの大文字，小文字を認識しようとする。	アルファベットの大文字を読むことができる。	アルファベットの小文字を読むことができる。	書かれた内容を考えながら黙読したり，その内容が表現されるように音読したりすることができる。		
			身近で見なれた簡単な英語について，大文字表記であれば様々な情報を手がかりにして理解することができる。	身近な英語について，大文字，小文字表記１語程度であれば，様々な情報を手がかりにして理解することができる。	基本的な語句や表現で書かれた英文であれば，あらすじや必要な情報を読み取ることができる。(Let’s Read U3,7,11, SP1)	物語文のあらすじや，説明文の要点を正確に読み取り，内容について話したり書いたりすることができる。(Let’s Read 1,2,3 U2,5)	ある程度の長さの文章を読み,内容をとらえて感想や意見をのべることができる。（Warm-up, LP3, SP3,4, Let’s Read 1,2,3, U3,4)
書くこと		アルファベットの大文字と小文字をなぞって書こうとする。	アルファベットの大文字を書くことができる。自分の名前を大文字で書くことができる。	アルファベットの大文字を書くことができる。自分の名前を小文字で書くことができる。	身近な事柄であれば，基本的な語句を使ってつながりのある文章を書くことができる。（U4,7,10, MP1, WP1,3)	身近な題材について，自分の考えや気持ちを含めながら，順序良くまとまりのある文章を書くことができる。(U3,4,6 WP1,2,3, MP1,2)	与えられたテーマについて,自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように論理的に文章を書くことができる。(U1,6, Writing Plus1,2,3, Multi Plus1,2)

（２）意欲を高める学習評価の在り方

評価の際留意する点として以下の４点（表４）を挙げ，指導者の共通理解を図るとともに評価準備時に確認した。評価方法は従来の行動観察に加えて，振り返りシートの改善，パフォーマンス評価の導入を行った。

表４　評価の際の留意点

妥当性	図りたいものが図れているか
信頼性	誰が行っても同じ結果が得られるか。(評価基準)
波及効果	評価することによって学習者の意欲が高まったか。 (学習者のモチベーション)
実用性	実施可能なものか（準備，評価時間)

① 振り返りシートの改善（図 1)

従来は１時間ごとに１枚の振り返りシートで学習者の学習状況を把握していた。しかし，指導した内容を正しく評価することに着目した際，単元ごとに１シートにすることで，意欲付けにつながったり学習内容の定着が図られるなど，学習効果が期待できると考えた。具体的には以下の３点である。

まず，単元末につけたい力を毎時間どのように積み上げていけばよいか，つまり Backward　Image で指導していく。そのことにより，つけたい力（評価する内容）に

沿って毎時間がつながり，1時間の中の活動と活動にもつながりができたのである。

次に，ゴールイメージがより明確になってきたことである。つまり，単元の最後に，学習者が何ができるようになっていればよいか，という具体的な姿が，指導者に始めから見えてきたことである。

最後に，そのイメージを指導者と学習者が共有しながら授業が展開できるようになったことである。指導者が授業ごとの振り返りシートから，学習状況を把握することで，つまずきのある学習者や学習内容に留意して，次時に臨むことができるようになった。

変更前　　変更後

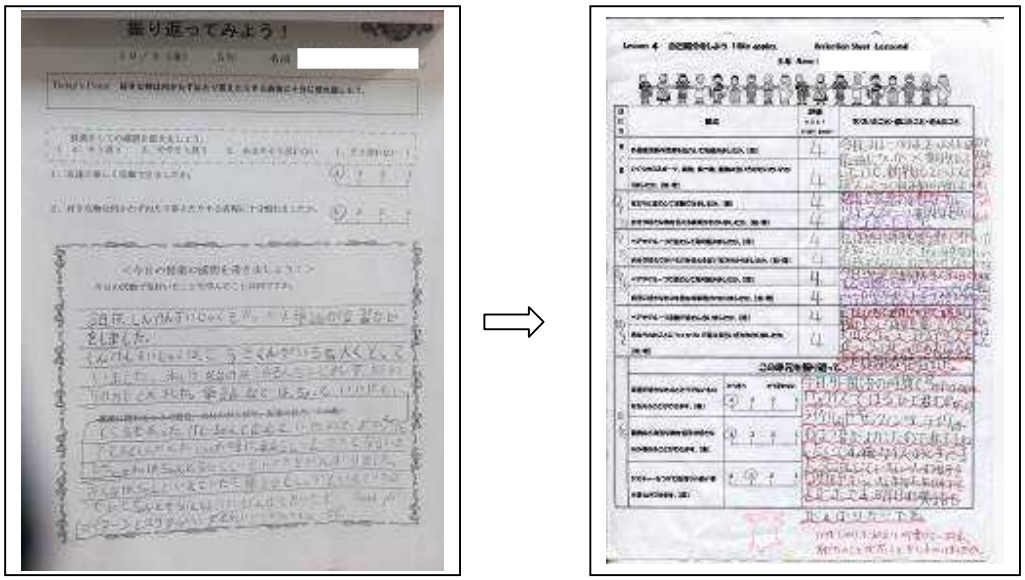


図１　振り返りシート

この振り返りシートの改善が授業構成の改善にもつながったのである。ゴールイメージの共有に際し，文章表記だけでは学習者にイメージが伝わらないということで，授業者がモデルとなって実演を行うことにした（図２）。この実演を見て，学習者は既習の表現にないものを聞き取り，新しい言語材料に気づき各時間の目当てを理解していくのである。この単元の場合は表５のとおりである。

表５　学習者の気づき



・形や色を表す英語の単語を知らないとできないな。
・数や動物の言い方を復習したいな。
・相手の好みをたずねる文が言えないといけないな。
・自分の好きなものを答える言い方を復習したいな。

図２　単元最終の活動の実演

② パフォーマンス評価の導入

教科化に伴い，学習者の一人一人の定着を見取る場を設定することが，必須項目の１つだという認識は指導者に共通している。そこで，いつどのような内容を誰が行うかを模索する中で，５，６年生対象に学期に１回パフォーマンス評価の場を設定することにした。表４の４つの留意点に配慮しながら，年間指導計画に基づいて観点を設定し，その技能が見とれるタスクを作成した。具体を挙げると，学習者には「ステッカーラリーデイ」と称し，各ブースでお題をクリアしステッカーを手に入れようと呼びかけた。中学校のいわゆる「テスト」とは異なるもので多少のクイズ的要素を取り入れて小学校らしいネーミングにしてみたのである。そのことによって外国語のテストを受けるという緊張感や抵抗感を減らすことになったのではないかと考える。評価体制は以下のとおりである（表６）。

表６　第６学年

Lesson	Lesson3	Lesson4	Lesson5	統合
言語材料	can	Go straight. Turn right (left) Let’s go. Stop.	文字認識	絵本を見て３つ以上英語で言ってみよう。
観点	話すこと	聞くこと	読むこと	話すこと
評価基準	できる：最初の言葉を提示したら後は自分で表現できる。 A:３つのうち２つ以上できる　B:１つはできる　C:１つもできない			
担当者	HRT	ALT	教頭	JTE
評価形態	クラスを２つに分け４ブースを自由に回る。試験を受けていないものは別室で文字を使った自己表現を行う。（自分の誕生日を英語で書いてみようなど。）			

③ パフォーマンス評価の実際

年間指導計画では,Lesson3 では話すことを評価の観点にしているため,ここでは「話せるかどうか」を課題にした。表７を見て「できること」「できないこと」を手掛かり

に先生に質問することによって誰に扮しているか学習者が当てるという課題である。この課題の後で，フリートークとして，自分自身について３０秒程度のやり取りをおこなう。

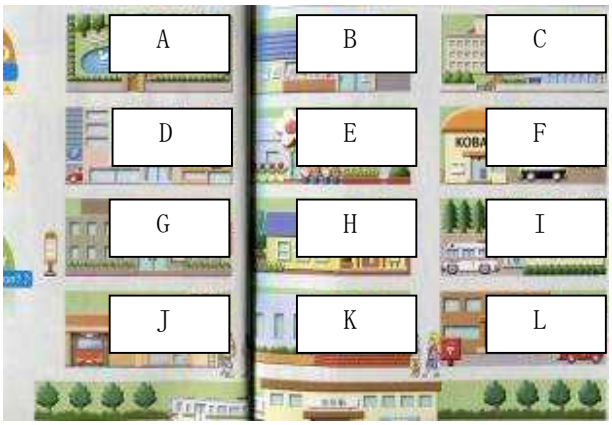
表８　Lesson3



使用言語
例：I can play soccer.ButI can't ride a unicycle. I can swim.I can play the piano.
その後のフリートーク
例：I can play tennis.And you?
　Can you cook? What food do you like?

Lesson４の課題は初見で行いたかったため，地図は英語ノートのものを使用した（表８）。まずカードを引いて，その場所をALTに尋ねることとした。一度で聞き取れないときは“Slowly ,please”や“Once more,please.”を使うようにALTに促してもらうように打ち合わせしておき，自然な会話を心掛けた。

表８　Lesson4



地図を見ながら,ALTの説明を聞いて指定された建物の場所を見つけよう。

使用言語(話す)
Where is the hospital? I know. It's A.
（聞きとる表現）
Go straight. Turn right(left)
Here is the hospital.
That's(not)right. Try again.
That's right.

表９　Lesson5

Category	発音されている単語を指で差してみよう。
Musical instrument	piano　recorder
Color	blue　red　green
Animal	cat　dog　rabbit
School room	music room　science room

本校のCan-Doリスト形式の学習到達目標の中で,学習者は卒業時に文字に関しては「アルファベットの大文字,小文字が読める。」「単語は慣れ親しむ。」としている。これは，はっきり単語が読めるというより「なんとなくわかる。」「文字が読める

かもしれない。」という認識をねらっているものである（表９）。このようなことから，文字認識の評価活動では，課題をカテゴリーに分け，二択，三択できるようにしているのである。課題に関しては，Jr. 英検を参考に作成している。

中学校おける英語教育において，即興的な英語運用能力は明らかに重要である。では，小学校においてはどうか。教科としての英語教育の位置づけの中で初歩的な即興性を試す場面を設定することは，動機づけの意味からも有効であるのではないかということである。この考えに基づき，絵本を活用したパフォーマンス評価を試行してみた。具体的には，学習者が絵本の場面を選び，単語レベルでもよいのでその絵の一部分を英語で描写してみるとういうものである（図３）。この評価の前後には，授業中にペア活動として，違う絵本を使って，同じ活動を行っている。評価の際，言いたくても表現できないもどかしさを学習者は体験しており，「次は言えるようになりたい。」「新しい表現を学習したとき，こう言えばいいのだ。」という，学習と学習のつながりを実感する機会になっている。



図３　統合課題

④ パフォーマンス評価の検証

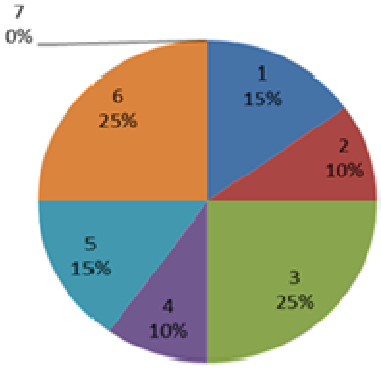
試行し始めたばかりのパフォーマンス評価は，検証を行い具体的な改善点を明確にする必要がある。まずは波及効果の観点である。そのため評価後に学習者に意識調査を行った。結果は表１０，１１のとおりである。

表１０　ステッカーラリーについて意識調査

１．ステッカーラリーを体験してみてもう一度やってみたいですか。

質問項目	もう一度やってみたい。	あまりやりたくない。	もうやりたくない。
数値	１００％	０％	０％

表１１　　１で答えた理由を書いてください。



1	先生に英語力をチェックしてもらえる
2	ステッカーをもらえてうれしい
3	自分でできることできないことがはっきりする
4	力を試すいい機会になる
5	英語を聞いたり話したりするのが楽しい
6	次への目標が見つかった
7	その他

上記の意識調査から，児童はこのパフォーマンステストを経験することによって，その後の学習に意欲を示し取り組もうとしていることが明確になった。その理由は様々であるが，テストすることによって，意欲が低下することがなかったことは，指導者にとって大きな成果であった。この調査を通して，児童はたとえ全ての課題が容易に理解できなくても，自分が学習してきたことが使えるかどうか試してみたいと思っていることが理解できた。この「試す機会の設定」が指導者には求められている。

さらに児童が,「自分は英語ができるのかもしれない。」と思えるようなテスト内容，運営を企画していかなければならない。その際，学習が十分目標に到達していない児童に対しては，個別指導をどの時間で行うか等の事後指導の設定を考えなければならない。

４．成果と課題

（１）情意面

年間２回の外国語教育アンケートを実施し研究の検証の資料としている。

①〔成果〕

４項目とも肯定的に回答している児童が大半である（表１２）。英語の授業を楽しみにしている様子は授業時の参加態度からも容易にうかがうことができる。

②〔課題〕

英語の授業で好きな活動の１位が「ゲームを行うこと」（１００％）となっており，「自分の意見を発表すること」や「先生やともだちと英語でやりとりすること」に関しては１位と比較して７０～８０％とポイントが下がっている。このため，コミュニケーション力を伸ばすためには，発表活動や会話のやりとりの活動が必要となることを実感し，認識できる授業づくりを行う必要がある。

表１２　意識調査：対象５，６学年児童

質問項目	英語の授業は好き	英語が好き	英語が使えるようになりたい	英語は大切だと思う
数値	９５％	９１％	９７％	９７％

（２）技能面（聞くこと，読むこと）

聞くことの検証としては，5年生はJr英検ブロンズ，6年生はJr英検ブロンズ，シルバーを受検している。その際，目標値を設定し，ポイントの低い項目について報告し，改善策について指導者全員で意見交流を行っている。

（３）技能面（話すこと）

話すことの検証はパフォーマンステストの結果を学年で行っている。

①〔成果〕前述の通り学習者の波及効果が得られたことである。

②〔課題〕準備やテストの体制が十分とれない場合は実施できないこと。また，回数を増やして妥当性，信頼性を高める必要があることが挙げられる。

（４）技能面（書くこと）

書くことの検証は，ワークシート作成時の観察や，作品を複数の目で点検した。その後，今後の指導項目の留意点について共通理解を行った。

①〔成果〕自分が書きたいものを選んで書くことによって興味を持って意欲的に取り組むことができた。

②〔課題〕単語と単語を空けて書くことや，大文字と小文字の使い分け等の英語独特の表記の仕方の指導充実である。

５．終わりに

現在の小学生が，近い将来目の当たりにするグローバル社会を生き抜いていくために必要とされる資質として，高度なコミュニケーション能力が挙げられる。その能力の育成の一環として，小学校の外国語活動が外国語科として教科の位置づけで実施されようとしている。外国語教育の研究開発を行う際，活動と教科の相違点を明らかにする必要がある。それは具体的には何かというと，授業を中心に据えた教育実践を行う立場の者として，それは学習者に技能の定着を求めるか否かに尽きるという研究仮説を立てた。そして，それに基づいて研究を続けてきた。

何を，いつ，どの程度定着させるかの目標を設定し，その定着の状況をどのように評価するべきかを模索しながら年間指導計画を作成した。そして見直しを行いながら運用して２年目が終わろうとしている。この短期間の実践の成果と課題を，今後の研究開発に有効に生かしていきたい。

引用文献

Roderick　Hunt（１９８６）Oxford Reading Tree.:OXFORD UNIVERSITY PRESS